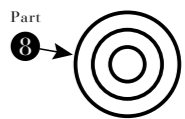


Special Feature  
Reframing  
Japan  
from  
the  
Outside

「論考」

ルース・ベネディクトの『菊と刀』をはじめ、日本論にはさまざまなものがあるが、それら国内外の交錯する眼差しから確立された日本の「自画像」とはいかなるものか。「欧米的個人主義VS日本的集団主義」という観点を軸に、日本の在り方を規定してきた知られざる語りの系譜を辿り直すことで、自文化の前提を問い直し、新たな自己発見の可能性を探る。

## 戦後日本の復興と日本的集団主義

バブル崩壊後、景気低迷が長期化している今日では夢物語のようだが、戦後の廃墟から1950年代の高度経済成長を経て、1970年代には「20世紀の経済的奇跡」とまで言われた復興を日本が成し遂げると、世界の人々は拍手喝采した。そして、多くの海外の学者が日本の成功の秘訣を探ろうとした。そうした時代に強調されたのが、終身雇用・年功序列・企業組合を3本柱とする「日本的経営」であった。同時に、日本の会社は単なる利益追求を目指す個人の集合ではなく、労資が一体化した家族のような存在だという「経営家族主義」論も盛んに唱えられた。会社を家族になぞらえる経営家族主義には、全体のための自己犠牲を厭わ

策も充実しているので、会社への忠誠心や一体感が自然と養われる。それゆえ、日本の会社は「価値、先祖、信仰を共有する大家族」なのだ、とアベグレンは論じた。彼は無条件に日本を賞賛したわけではないが、戦勝国アメリカの学者が日本の企業文化を認めたことに、多くの日本人は自負心をくすぐられた。

この手の議論には、明治以降の度重なる労働争議や労使の対立を看過しているという批判があるが、少なくとも英語圏では大きな影響力をもった。たとえば、イギリスのロナルド・ドーアは、『イギリスの工場・日本の工場』（原著1973年）の中で、両者の根本的相違はイギリスの個人主義と日本的集団主義にあると説いた。彼によれば、会社と社員の利益が反する場合、日本人ならば多少の自己犠牲を厭わず会社のために尽くすが、イギリス人にそうした期待をするのはまず無理だという。それだからこそイギリスは斜陽で、日本は成長したというわけだ。ドーアは、日本人は「会社という家族」のために自分の家族を犠牲にしがちであると警告する一方で、「逆収斂」という概念を提唱した。これは、近代化の遅れた日本が欧米先進諸国に収斂する（＝いずれ同化する）のではなく、近代化に遅れたからこそ日本には「後発効果」があるので、いずれ欧米が日本に収斂するという考えであった。欧米を発展モデルとする近代化論の逆を行ったのである。

戦後の日本経済が絶頂期を迎えつつあった1979年、1冊の衝撃的なタイトルの本が出版された。『ジャパンアズナンバーワン』がそれで、著者はハーヴァード大学教授のエズラ・ヴォーゲルであった。彼によれば、日本の大企業が国際的成功を収めたのは、集団への忠誠心が日本人に生まれつき備わっているからではなく——海外では日本の「侍」にそうしたイメージがついている——、個と全体の調和を重視する日本の組織風土が社員の帰属意識を強め、それが高い生産性に寄与したからである。ヴォーゲルは1960年代に東京近郊の自治体を調査した硬派の社会学者であったが、一般向けのこの本では、日本の成功を鏡として自己満足に陥りがちなアメリカ人に反省を迫った。副題が「アメリカへの教訓」となっていた所以である。もともと、日本の多くの読者は『ジャパンアズナンバーワン』というタイトルそのものに酔った。

## 日本人学者と経営者の影響

こうした議論が世界を席巻する中で、日本の学者はどのような役割を果たしただろうか。一見、海外の論調は日本国内の議論と無関係なように思われるが、実

# 日本の自画像の系譜

## 欧米的個人主義 VS 日本の集団主義

ない日本人的性格も含意されていて、そこそが欧米の個人主義に対する日本的集団主義の極みとして理解されたのである。

## 海外の代表的「経営家族主義」論

こうした議論に先鞭をつけたのが、ジェイムズ・アベグレンの『日本の経営』（原著1958年）である。原副題「その社会組織の分析」から明らかのように、彼の力点は経営の社会的側面にあった。アベグレンによれば、使い捨てのアメリカの労働者とは対照的に、日本では大企業の社員もまるで家族の一員のように扱われていて、退職まで仕事は保障されている。また、給与体系は生産性と直接関係ない社員の年齢や家族構成といった社会的考慮に基づいているうえに、福利厚生

は陰に陽に日本の影響を受けている。そもそも、後述のように経営家族主義そのものが明治日本で生まれた概念なのだが、日本の会社を家族に比した外国人学者の多くは、産業社会学者で『日本の経営』（1984年）を著した尾高邦雄や、社会人類学者で文化勲章を受章した中根千枝の影響を受けていた。特に、中根の『タテ社会の人間関係』（1967年）は、1970年に『Japanese Society』として英訳され、海外における日本研究の必読書となった程である（ただし原典と英語版では構成と表現がかなり違う）。

私の専門は文化人類学なので、中根についても少し詳しく述べると、彼女は「場」と「資格」という対概念を提示して、日本における場の重要性を強調した。大学を例にとれば、教授や事務員や学生といった資格の差を乗り越えて、同じ大学という場を共有することにより醸し出される一体感が大切なのだという。場を共有する者は「ウチ」であり、それ以外の者は「ヨソ」である。そして、この日本の場の原型は生活の場としてのイエ（家）にあり——イエは家族の他に同居する親族や住み込みの従業員などを含む生活集団として理解される——、会社を含むすべての日本の組織はイエの構造的拡大に他ならない、というのが中根の主張であった。JRが「国鉄」と呼ばれた時代に「国鉄一家」という標語があったが、中根によれば、それは日本人のイエ意識の反映に他ならない。海外の経営家族主義論者にとって、中根の著作は日本のエスタブリッシュメント（主流派）からの格好のお墨付きとなったのである。

お墨付きを与えたのは学者だけではなく、経営者も日本の伝統としての経営家族主義について積極的に発言した。その代表がソニーの盛田昭夫で、彼は『Made in Japan』（1986年）という外国人読者向けの著書で、「日本の経営者のもっとも重要な使命は、企業内に家族的雰囲気を作ることである」と公言した。日本の文化ナシヨナリズムを研究した吉野耕作によると、いわゆる日本人論・日本文化論の最大の消費者はビジネスマン、特に海外進出を果たした大企業の戦士であったという。異文化折衝の現場に立たされた彼らは、盛田のような発言を携えて外国人と交流したのだろう。

## 経営家族主義と家族国家観

ここで歴史を振り返ると、経営家族主義は明治以降の家族国家観と深い関係がある。家族国家観とは、日本を1つの大家族とみなして、天皇と臣民の関係を「家

長と赤子」および「本家と分家」になぞらえたものである。ここでは、親に孝を尽くすように天皇に忠を尽くし、家の先祖を貴ぶように皇室の神を貴ぶことが求められた。家族国家論は明治20年代から説かれ始めた国家イデオロギーで、学校では修身の授業を通じて全国的に浸透し、第2次世界大戦敗戦まで猛威を振るった。その法的基盤は家制度を規定した明治民法（1898年施行）にあった。会社を家族になぞらえる経営家族主義は、国家を家族になぞらえる家族国家論のミニチュア版である。

経営家族主義を早くから標榜した官営企業は国鉄であった。鉄道院初代総裁の後藤新平は、従業員に対して「鉄道従業員はすべて家族たるの精神をもって」「常に家の名譽利益のために活動すべき」と説き、「国鉄一家」意識を植え付けた。1908（明治41）年のことである。大正時代が近くなると、資本家は盛んに経営家族主義を持ち出して、労働者の待遇改善要求に対処しようとした。その典型が工場法（1882年立案、1911年成立）にまつわる論争で、多くの有力資本家は、権利と義務を中心とする欧米の個人主義に由来する工場法は、家族主義を美德とする日本には合わないという論陣を張った。同様の論法は労働組合法にも見られた。法案は1920年頃に起草されたが、日本の「醇風美俗」を説く資本家によって幾度となく阻まれ、法律制定は終戦後まで持ち越された。

ここで日本人論・日本文化論の観点から注目すべきことが1つある。それは、欧米的個人主義と日本的集団主義というパラダイムが、既に明治大正の日本人の言説に見られたという事実である。しかも、集団主義（この場合は経営家族主義）は常に個人主義と対峙する形で語られていて、欧米との差異を正当化し日本の独自性を主張するために持ち出されているのである。不思議なことに、欧米の個人主義は所与として措定されていて、その内実が問われることは今も昔もほとんどない。ただ、日本の政府や資本家が個人主義を警戒したのは、労働運動の背後には共産主義思想があり、共産主義は究極的に欧米の個人主義に由来すると思われるからだと、という事実は覚えておくべきだろう。

## 欧米的個人主義 vs 日本の集団主義

——知られざる海外の知的系譜

いったい、欧米的個人主義と日本的集団主義という語りは、いつ誰によって始められたのだろうか。ものごとの起源を問うほど難しいことはないが、私の見立

てではパーシヴァル・ローエルの『極東の魂』（原著1888年）に1つの原点があるのではないかと思う。今日では内外ともに注目度は低いですが、かのラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が日本を訪れるきっかけを作った本と言えば、関心は一気に高まるだろう。興味深いことに、そのローエルは大森貝塚を発見したエドワード・モースのアメリカでの講演に触発されて訪日したという。以下、個人主義と集団主義を中心に海外の日本人論・日本文化論の系譜を簡単に辿るが、年代順に流れを追うのではなく、読者に馴染みの深い戦後の著作から明治時代に遡って記す。

### 1 R・ベネディクト『菊と刀』（原著1946年）

アメリカを代表する文化人類学者ルース・ベネディクトの『菊と刀』は、世界でもっとも多く読者を獲得した日本論の1つである。ただ、彼女は日本研究の専門家ではなく、日本と関わりをもったのは戦時中にアメリカ政府の情報機関に配属されたからであった。また、日本を訪れたことがなかったため、事実誤認や誤解が少なくない。そのベネディクトが歴史に名を残したのは、情報機関の同僚の力によるところが大きい。

大方の解説書とは裏腹に、実はベネディクトが日本人の集団主義に触れた箇所はごく僅かで、第3章「各々其ノ所ヲ得」に多少見られる程度である。この章の焦点はアメリカの自由平等と日本の階層制度の比較にあり、出自や地位の差による束縛を嫌うアメリカ人に対して、日本人は「分相応」に振る舞うとされた。ベネディクトによれば、そうした行動を学ぶ場がイエであり、家長はイエの代表としてその名譽を守り、家人は各々の地位（嫡子の長男と次三男以下、実子と養子などの区分）に従って行動するようになるという。日本では「イエの意志への服従」が「共同の忠誠の名において要求される」というのがベネディクトの主張で、それは全体が個に優先する集団主義の言説と一致する。

### 2 J・F・エンブリー『The Japanese Nation』（1945年）

同じく文化人類学者のジョン・F・エンブリーは、戦前に熊本の実業家を調査して『日本の村 須恵村』（原著1939年）という貴重な記録を残した。その彼が書いた本書（nationには民族・国民・国の意味がある）は、今日でこそ知る人ぞ知る存在だが、占領期には軍関係者を含むアメリカ人によって広く読まれた。一般書なので日本の社会文化的特徴を分かりやすく説明しており、所々にアメリ



### 『極東の魂』

パーシヴァル・ローエル

Percival Lowell (1855-1916)



### 『日本』

ラフカディオ・ハーン

Lafcadio Hearn (1850-1904)



### The Japanese Nation

ジョン・F・エンブリー

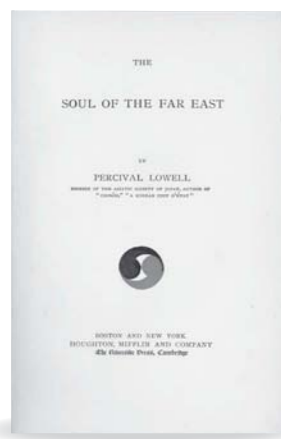
John F. Embree (1908-1950)



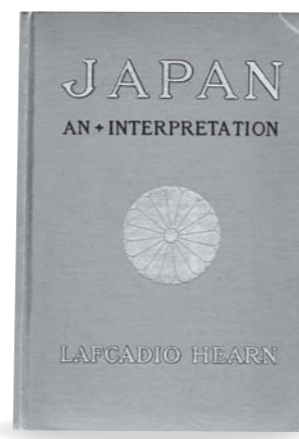
### 『菊と刀』

ルース・ベネディクト

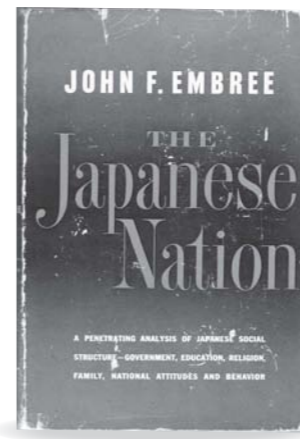
Ruth Benedict (1887-1948)



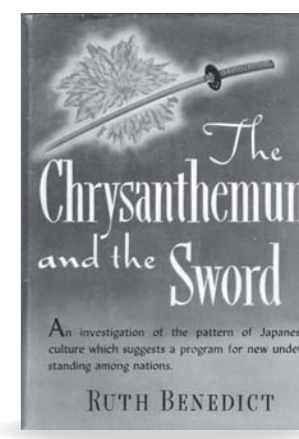
『極東の魂』原著初版(1888年刊)。タイトルページには東洋を象徴する太極図らしきものが印象的に描かれている。



『日本』原著初版(1904年刊)。金粉で施された菊の紋章は皇室のものとして、当時物議を醸した。



The Japanese Nation(1945年刊)。下部には「政治、教育、宗教、家族、国民のものごとに対する考え方や態度、行動まで、日本の社会構造を鋭く分析」とある。



『菊と刀』原著初版(1946年刊)。異国情緒漂う菊と刀のイラストが目を引く。



カ人の個人主義と日本人の集団主義が対比されている。エンブリー曰く、「日本の政治構造全体の根底には多くの伝統的観念が潜んでいる。社会は個人より重要であるという考えはその1つだ」「日本文化は個人より集団の価値を重視する。日本人は自分のためではなく家族や国のために働くように教えられている。日本的イデオロギーにとって個人主義は罪である」「日本人は集団的連帯を強調する。それは自集団への忠誠という義務を含む。その結果、彼らは雇用者や家族の利益をはじめ、自分が所属するすべての集団の利益を守ろうとする」。

### 3 L・ハーン『日本』(原著1904年)

江戸時代末期の開国から明治中期にかけて、「お雇い外国人教師」を含む多くの知識人が欧米から訪れて日本の風俗について語った。しかし、その後は国際情勢の変化によって訪問者数も報告数も減っていった。明治後期の著作が多いハーンは、いわば第2世代に属する。今日、彼は日本人の間で『怪談』の作者として知られているが、当時の西洋では卓越した日本文化の紹介者として名を馳せていた。本書は彼の最晩年の著作である。

ハーンの日本観の1つの大きな特徴は、日本の歴史は日本の宗教の歴史そのものだという考えである。そのため、家族を

論じるにせよ共同体を論じるにせよ、ハーンは日本人の信仰なくならず祖先崇拜に注目した。また、意外にも彼はハーバート・スペンサーの社会進化論に影響を受けていて、家族内の祖先崇拜が共同体内の氏神信仰に発展し、それが国家の皇祖神信仰に発展したと主張した。『日本』の第5章「日本の家族」におけるハーンの叙述は、古代と現代の区別が曖昧だという欠点があるが、家族全体の利益が個人の自由を優先することを強調した点で、日本的集団主義を説いたと理解しやすい。ハーン曰く、「どれほど個人は宗教的集団としての家族の犠牲になったことか」「祖先崇拜は個人の自由を認めなかった。誰も自分の快楽のままに生きることはできず、誰もが規則に従って生きざるを得なかった」「個人に法的地位は

大きく寄与した。ただ、ローエルには社会進化論者としての側面があつて、人間の精神は個人の成長とともに発達するので、没個性を特徴とする極東は滅びる運命にあると考えていた。当時の欧米列強の圧倒的力に鑑みれば、そうした考えを一笑に付すことはできないが、西洋文明の驕りが個人主義を集団主義の上に置いたことは確かだろう。

## 他者の眼差しがもたらすもの

以上、経営家族主義を中心に、内外の代表的な日本人論・日本文化論の系譜を辿った。最後に3つのことを述べて本論を閉じたい。

第一は、海外の文化人類学者の間では、エンブリーやベネディクトが日本研究の起点となっているので、それ以前との関係がほとんど問われていないということである。実はかく言う私も無関心だったのだが、10年ほど前にハーンの『心』(原著1896年)を読んでいたとき、彼の日本人の祖先崇拜の描写が、『菊と刀』でもっともよく知られた恩と義理の部分とよく似ていることに気づいた(詳しくは桑山編『日本はどのように語られたか』の序論を参照)。「菊と刀」には参考文献がほとんど掲げられていないので、ベネディクトの日本観がどのように形成されたかは長らく謎だったが、最近になって上述の情報機関の同僚——特に『日本人の性格構造とプロバガンダ』(原著1942年)の著者ジェフリー・ゴラー——の研究に影響されていることが明らかになった。おそらく、ベネディクトはハーンにも影響されていたであろう。本論で試みたように、明治大正期に日本を訪れた外国人の著作を丹念に読み込めば、見失われた戦前と戦後の接点が見つかるかもしれない。

第二は、モースが活躍した明治初期から、日本の知識人や指導者は、時として欧米人の日本論に感銘を受けながら、時として彼らに反発しながら自画像を描いてきたということである。そのことは、戦後直後に出版された『菊と刀』が、いまだに多くの日本人によって議論されていることから明らかだろう。既に述べたように、明治大正期に経営家族主義を説いた日本の資本家は、それを欧米の個人主義と対峙させて日本の独自性を主張した。同様の構図は、経営家族主義の基となった家族国家観にも言える。祖先／皇祖神崇拜の重要性を説いた彼らが意識していたのは、個人の信仰を重視するキリスト教と、そこから派生する(と想定された)個人主義である。その意味で、日本人が展開した集団主義論は、近現代

なく、家族が社会の単位であった」「家長でさえ法的には家族の代表者としてのみ存在した」。そして、続く第6章「共同体の祭祀」では、家族は地域共同体(村)の意志に従属したと論じたのであった。

### 4 P・ローエル『極東の魂』(原著1888年)

天文学者として知られたローエルは19世紀末に東アジア諸国を訪れ、同地域の精神文化に関する著作をいくつか残した。本書の主題は、「極東人」として一括

された日本人・朝鮮人・中国人の「没個性」(impersonality)で、その家族生活・言語芸術・宗教における様子が描かれている。没個性の対比概念は西洋の「個性」(individuality)である。

冒頭で西洋と極東はすべてが真逆だとしたローエルは、第1章「自我」で「自我が西洋人の心の本質であるなら、極東の魂は没個性である」と説いた。そして、続く第2章「家族」と第3章「養子」では、以下のような議論を展開した。(1)極東の社会単位は個人ではなく家族である。(2)自己を中心に人間関係が回る西洋人の社会観は天動説的であり、極東人のそれは家族を回転軸とする。(3)極東の帝国は1つの大家族に、家族は1つの

小帝国になぞらえることができる。(4)家長の権限は彼個人の力ではなく、家族の代表としての地位に由来する。(5)個々の家族成員の生活は家族全体の生活と不可分である。(6)養子をとるのは子どもへの愛情からではなく、家族の系譜を永続させるためである。それゆえ、極東では成人の婚養子が多い、等々。そのうえで、ローエルは極東の家族生活を誕生から結婚まで概観し、個人の行動が家族の名のもとに規制されている様を描いた。

対象を日本に限ると、家族国家観が登場する前に、「帝国は1つの大家族」と指摘したことは卓見である。また、西洋の自我と明確に対比する形で極東の没個性について述べたことは、後の個人主義と集団主義というパラダイムの形成に大の覇権を握った欧米への「反覇権的言説」であった。当初、それは欧米の学者によつて疑問視されていたが、戦後日本経済の復興をきっかけに肯定的に評価されるようになる、それが日本に逆輸入されて多くの日本人自身の自画像に取り込まれたのである。

第三は、いま述べたことと関連するが、自己像は他者像と表裏一体の関係にあるということである。それは、自己は他者との関係でのみ存在する、という事実から窺い知ることができよう。もともと、すべての他者が自己にとって同じ意味をもつわけではない。自画像を描く際の「重要な他者」とは、肯定的にせよ否定的にせよ、自己が比較の対象として選んだ相手である。近現代の日本にとって、この重要な他者とは欧米であった。それゆえ、欧米人の日本に対する眼差しは、日本人の自画像に決定的な重みをもった。ただ、ここで注意すべきは、日本的集団主義のアンチテーゼとして措定された欧米的個人主義は、きわめて一般化かつ理念化された他者像であつて、その内実が十分検討されていないということである。実は、家族国家観を提唱した日本の知識人の欧米理解が浅薄であるという批判は、彼らの論敵によつて度々なされていた。

この事実がグローバル化時代を生きる我々に与える教訓は明白である。それは、国内外で頻繁に接触するようになった外国人——人類学者は彼らのことを「異質の他者」と呼ぶ——に対する深い理解がなければ、十全な自己理解は有り得ないということである。そして、不完全な他者像に基づく教条化した自己像は、戦前の皇国史観を支えた家族国家観のように、偏狭なナショナリズムと排外主義をもたらすだけだということである。逆説のように聞こえるだろうが、健全で等身大の自画像を描くためには、鏡像としての他者を注意深く観察して描く必要があるのだ。



ラフカディオ・ハーン『日本』原著初版(1904年刊)のタイトルページに描かれた巫女の姿は、日本の宗教にその文化的特質を見たハーンを考えを象徴している。

Kuwayama Takami

1955年生まれ。文化人類学者。カリフォルニア大学ロサンゼルス校博士課程修了。米国ヴァージニア・コモンウェルス大学助教などを経て、現在、北海道大学大学院文学研究科教授。著書『Native Anthropology』(Trans Pacific Press)、『ネイティブの人類学と民俗学』(弘文堂)、編著に『グローバル化時代をいかに生きるか』(平凡社)、『日本はどのように語られたか』(昭和堂)など。